

明治時代におけるアメリカ音楽の受容

ソンドラ・ウィーランド・ハウ／佐藤 渉（訳）

要旨

1853 年と 54 年に軍楽隊を乗せた「黒船」が来航し、日本にアメリカ音楽を伝えた。これらの軍楽隊はスティーヴン・フォスターの曲を演奏した。1870 年代、日本人はキリスト教の宣教師やアメリカから来日した音楽教師、フィラデルフィア百周年記念万国博覧会を通じてアメリカ音楽を学んだ。1880 年代にはボストン出身のルーサー・ホワイティング・メイソンと伊沢修二が共同で日本人向け音楽教科書を作成した。その中にはアメリカ音楽も含まれていた。1890 年代には西洋音楽のコンサートが流行した。20 世紀を通じてスティーヴン・フォスターの音楽が日本で人気を博したのは驚くにあたらない。なぜなら 19 世紀の日本では、すでに多様な西洋音楽が聴かれていたからである。

Keywords : 黒船, 伊沢修二, ルーサー・ホワイティング・メイソン, 軍楽隊, 教科書

はじめに

1853 年と 54 年に日本に来航したペリー提督率いる「黒船」には、軍楽隊が乗り組んでいた。この軍楽隊がスティーヴン・フォスターの曲を含むアメリカ音楽を日本にもたらしたのである。西洋音楽がはじめて日本に伝来したのは 16 世紀のことであった。イエズス会の宣教師が学校や教会を設立し、コーラス音楽を教え、パイプオルガンを導入したのである。1613 年にキリスト教の宣教師たちが日本から追放されると、長崎のオランダ式鼓笛隊を除いて西洋音楽は姿を消す。1870 年代、日本の教育者たちは軍楽隊、宣教師、日本を訪れた教育者、1876 年のフィラデルフィア百周年記念博覧会などを通じてアメリカ音楽を学ぶ。1880 年代になると、ボストンのルーサー・ホワイティング・メイソンが伊沢修二ならびに音楽取調掛と共同して日本音楽の教科書を作成する。その中にはアメリカ音楽も含まれていた。1890 年代には日本の上流社会で西洋音楽のコンサートが流行する。

本稿は、明治時代（1868-1912）の日本における、スティーヴン・フォスターの楽曲を含むアメリカ音楽について検証する。西洋音楽はどうやって日本にもたらされたのか。どのようなアメリカ音楽が輸入されたのか。また、19 世紀の日本ではどのような唱歌集や音楽教科書が入手可能であったのだろうか。

マシュー・C・ペリー提督

1638年以降、長崎の出島に滞在しているわずかばかりのオランダ人を除けば、日本は海外の船舶に対して門戸を閉ざしていた。アメリカは、中国に向かう船舶の石炭補給基地を確保するため開港を要求した。さらに、遭難した捕鯨船の乗組員救助に関わる条約の締結も求めた。マシュー・C・ペリー提督（1794-1858）は極東艦隊と呼ばれる船団を率いて日本遠征を指揮した。ペリーが4隻の「黒船」を率いて最初に来航したのは1853年7月8日から17日にかけてのことである。黒い船体をした「黒船」が、石炭動力のエンジンから黒煙を吐きだしながら到来したのである。艦隊は、2隻の蒸気船（サスケハナ号とミシシッピ号）に加え、それぞれが牽引する帆船（プリマス号とサラトガ号）から構成されていた。ペリーは日本人を楽しませ、乗組員の士気を高めるために音楽を重視した。そこで艦隊には楽団が乗り組んでいた。遠征にはイタリア人のバンドマスターが加わり、音楽家たちを指導し、指揮した。¹⁾

ペリーの最初の日本訪問中、何度か西洋音楽が演奏される機会があった。7月10日の日曜日、サスケハナ号では安息日の礼拝が執り行われ、聖書の朗読と祈祷がささげられた。また、フルバンドの伴奏で300名の水夫がアイザック・ワッツの“Old Hundredth”を合唱した。²⁾ 7月14日木曜日、楽団が“Hail! Columbia!”を演奏する中、ペリー提督は日本に上陸した。ペリーはアメリカ合衆国大統領ミラー・フィルモアの手紙を手渡した後、春にはさらに大規模な艦隊を率いて戻ってくることを宣言した。³⁾

ペリーは1854年2月まで沖縄、香港、マカオを訪問した。那覇ではミシシッピ号に地元の名士を招き、踊りと歌を上演した。マカオのコンサートホールでは、サスケハナ号の楽団による大演奏会が開かれ、香港からの観客が汽船に乗って訪れた。マカオでは通常週に2、3度、陸上で演奏会が開かれた。香港では汽船ボウハタン号の船上で「エチオピアン・ミンストレル」が上演された。劇場代わりとなった広々した甲板には、万国旗が飾られ、歌を交えた一幕劇を二編上演するため背景画が描かれた。艦隊が日本に向けて出航するまで、ボウハタン号ではショーが繰り返され、ミシシッピ号でも演奏会が開かれた。艦上の催しではしばしばミンストレル・ショーが上演された。「エチオピア人」という触れ込みのクリスティーズ・ミンストレルズを乗組員たちが真似たのである。クリスティーズ・ミンストレルズは、米国と英国を興行して回り、ステイヴン・フォスターの曲を広めた。ペリーの極東艦隊上の催しで、フォスターの曲がどの程度演奏されたかについては不明である。⁴⁾

1854年2月、ペリーは9隻の船を率いて日本に戻ってきた。艦隊は蒸気船（ボウハタン号、サスケハナ号、ミシシッピ号）、帆船（マセドニア号、ヴァンダリア号、サラトガ号、サウサンプトン号、レキシントン号）、補給船（サプライ号）によって構成されていた。3月8日、ペリー一行は現在の横浜の近くに上陸した。上陸の際には太鼓が鳴り響き、海兵隊がさざげ銃の姿勢を取った。3つの楽団がアメリカ国歌「星条旗」を演奏する中、黒人のボディガードを従えたペリー、将校、船員たちが行進した。協議を終えた提督は、楽団の演奏に合わせ、隊列を組んだ海兵隊員の間を行進して船へ帰って行った。横浜で海兵隊員の埋葬式が執り行われた際には、鼓笛隊がヘンデルの「サウル」を演奏した。⁵⁾

3月27日、ペリーはボウハタン号で盛大な宴会を催し、日本人高官と極東艦隊の士官をもて

なした。宴会では大量のシャンパンにワイン、リキュールがふるまわれた。晩餐のあとには minstrel・ショーが上演された。顔を黒く塗り、ストライプの上着とひだ飾りのついたシャツを着た船員が、黒人を真似て踊りや歌を披露した。観客はショーを存分に楽しみ、心から笑った。⁶⁾

神奈川条約は 1854 年 3 月 31 日に調印され、避難と補給を目的に下田と函館の 2 港が開かれた。サラトガ号は楽団が“Home, Sweet Home”を演奏する中、本国への帰路に就いた。⁷⁾ 5 隻の船が函館に立ち寄り、そのうちミシシッピ号とボウハタン号では日本人高官をもてなすショーが上演された。5 月 29 日、ボウハタン号で上演された「エチオピアン・エンターテイメント」あるいは minstrel・ショウには、「ミスタ・ボーンズ」(“Mistah Bones”)と「ミスタ・タンボ」(“Mistah Tambo”)の寸劇、ステイーヴン・フォスターの「主人は冷たい土の中に」(“Massa's in de Cold! Cold Ground”)を含む歌曲、若い水夫が貴婦人に扮した“The Lady of Lyons”に基づく風刺劇が含まれていた。ショーは大好評だった。⁸⁾ 下田でもエチオピアン・minstrel が上演された。ボウハタン号で行われたショーには 100 名以上の観客が集まった。1854 年 7 月 11 日には那覇港で那覇条約が調印された。地元の名士を招いて開かれたミシシッピ号艦上での別れの晩餐には、エチオピアン・minstrel の上演も含まれていた。⁹⁾

日本におけるアメリカ音楽

日本の指導者たちは、アメリカ音楽とアメリカ文化の諸相について様々な情報源から知識を得た。西洋のバンドリーダーが日本の楽団を指導し、キリスト教の宣教師が讃美歌を教えた。また、日本の教育者がアメリカに渡航し、アメリカの教育者が日本で教育にあたった。1876 年のフィラデルフィア万国博覧会では、日本とアメリカの指導者がそれぞれの展示からお互いの文化について学んだ。様々な文化交流を通じて、日本の国会図書館はアメリカの唱歌集や学校教科書を入手した。

軍楽隊

日本の音楽家は幾つかの国のバンドリーダーから西洋音楽を学んだ。徳川時代にはオランダ式の鼓笛軍楽隊が存在した。プラスバンドへ移行したのは 1869 年、薩摩藩が英国海軍のバンドリーダーだったジョン・ウィリアム・フェントンを雇い、30 人の男たちにバンド音楽を学ばせたのが最初だった。フェントンは 1871 年から 1877 年まで日本海軍軍楽隊を指導し、ドイツ人のフランツ・エッケルトが跡を継いだ。さらにドイツ人のアンナ・ローアが雇われ、10 人の団員にピアノを教授した。海軍軍楽隊は数名の日本人音楽家による指導も受けた。その一人、中村祐庸すけつねは宮廷雅楽師に西洋音楽を指導する役目も担っていた。¹⁰⁾

日本陸軍はフランス式音楽法を採用した。1872 年、陸軍はトランペットとビューグルの指導者、ダクロンを雇った。陸軍軍楽隊については西謙蔵、草場新作、小篠秀一ら日本人音楽家も指導にあたった。1882 年、陸軍は工藤貞次をパリ国立音楽院に留学させた。フランス人バンドリーダー、シャルル・ルルーは 1884 年から 1889 年にかけて陸軍軍楽隊を指導した。陸軍軍楽隊は 1872 年の鉄道開通を祝う演奏会で、西洋音楽と日本音楽のアンサンブルを披露した。1880 年代

を通じて、陸軍や海軍の軍楽隊はしばしば東京の鹿鳴館でのダンスに音楽を添えた。西洋音楽を最初に日本に導入したのは軍楽隊であったが、入手可能な資料からはレパートリーに含まれていた楽曲名は不明である。

キリスト教宣教師と讃美歌集

西洋音楽は、キリスト教の宣教師と彼らが携えてきた讃美歌集によって日本にもたらされた。初期の日米文化交流に重要な役割を果たしたのは、オランダ改革派教会とラトガース大学である。1860年代には日本人留学生がラトガースに学んだ。1869年卒のウィリアム・エリオット・グリフィス（1843-1928）は、日本で教鞭を執った最初のアメリカ人の一人である。彼の姉であるマーガレット・C・グリフィス（1838-1913）は1872年から1874年まで東京で英語を教えた。ラトガース大学の教授、デイヴィッド・マリー（1830-1905）は1873年から1878年まで文部省の顧問を務めた。彼はフィラデルフィア万国博覧会で日本人を援助し、東京教育博物館に所蔵する物品を購入した。¹¹⁾

1860年代には、監督派、改革派、長老派のミッション・ボード（海外伝道機関）によって、アメリカ人宣教師とその妻たちが日本に派遣された。女性はキリスト教コミュニティで積極的な役割を果たした。女子学生の通うミッション・スクールでは、聖書や讃美歌を通して英語を教えた。「主われを愛す」（“Jesus Loves Me”）や「よい国あります」（“There Is a Happy Land”）の歌詞は日本語に翻訳され、大きな巻物に書き記された。讃美歌集は長崎、神戸、横浜で出版された。長老派の宣教師でヘボン式ローマ字を発明したジェイムズ・カーティス・ヘプバーンの夫人は、横浜の日曜学校で教えた。オランダ改革派教会が派遣した宣教師、メアリー・キダー（1834-1910）は横浜で教育に従事した。彼女が創設したフェリス・セミナリーはフェリス女学院として現在に至っている。¹²⁾

アメリカの日本人教育者と日本のアメリカ人教育者

日本の教育者がアメリカ式教育について学んだのは、岩倉具視（1825-83）率いる使節団が1871年から73年にかけて18カ月間米欧を視察した折であった。使節団には文部理事官の田中不二麿（1845-1909）も加わっていた。彼は多くの学校を訪問し、1876年のアメリカ独立百周年記念フィラデルフィア万国博覧会の特別文部理事を務めた。田中は1万ドル相当の学校関連の物品を購入した。明治政府は留学する学生に11,248通の旅券を発行した。日本の留学プログラムに参加した学生は、1867年から78年まではアメリカ、79年から90年まではヨーロッパで学んだ。19世紀には、日本の教育者がアメリカの教育と文化について学ぶ機会は豊富にあったのである。¹³⁾

日本で雇用された外国人は、近代化に欠かせない英語とその他の多くの技術を伝え、明治日本の発展に重要な役割を果たした。こうした外国人は、中央政府や地方政府、さらには民間組織によって雇われた。彼らは「お雇い外国人」、あるいは簡単に「雇い」と呼ばれた。マリアン・マッカレル・スコット（1843-1922）は1872年に開設された東京師範学校の教師となった。スコットはサンフランシスコのグラマー・スクールの校長を務め、カリフォルニア州試験委員会のメンバーでもあった。彼はアメリカの学校で使用されている備品と本を日本に輸入した。そして

教材を翻訳させ、通訳を介して授業を行った。¹⁴⁾

ラトガース大学の教授であったデイヴィッド・マリー（1830-1905）は、1873年から78年にかけて文部省の顧問を務めた。田中不二麿が1872年公布の教育令を起草する際、マリーは助言を与えた。フィラデルフィア万国博覧会では日本の指導者を支援し、東京教育博物館に所蔵する物品を購入した。博覧会の後、マリーは日本に戻り、東京大学の設立に協力した。

アメリカ建国百周年を記念する博覧会は、フィラデルフィアで1876年5月から11月まで開催された。この博覧会は、アメリカ人が日本について学び、日本の教育者がアメリカの教育について学ぶ良い機会となった。日本の展示は、磁器や陶器、絹織物や刺繍、教材、農産品が中心であった。マサチューセッツ州の展示は、学校の備品、教科書、ルーサー・ホワイティング・メイソンの楽譜集を売りにしていた。¹⁵⁾

ルーサー・ホワイティング・メイソンと伊沢修二

1880年代、伊沢修二（1851-1917）とルーサー・ホワイティング・メイソン（1818-1896）は共同で日本向けの音楽教科書を作成した。¹⁶⁾ 文部省は1875年から1878年まで伊沢をアメリカに派遣し、教員養成を学ばせた。伊沢はマサチューセッツ州のブリッジウォーター師範学校に通い、ボストンでメイソンと共に音楽を学んだ。ボストンの初等学校の音楽教育長を務めていたメイソンは、アメリカで最初の学校向け音楽教科書シリーズである *National Music Course* を出版した。¹⁷⁾ このシリーズには、楽譜、リーダー（生徒向けの唱歌集）、教師向け手引きが含まれていた。メイソンと伊沢は日本で唱歌を教えるための楽譜を作成した。彼らはメイソンのチャートから採用した曲に、日本語の歌詞をつけた。

メイソンは1880年3月から1882年7月まで日本で教育に携わることになるが、伊沢とアメリカの留学生監督であった目賀田種太郎（1853-1926）がメイソンの招聘責任者であった。伊沢は東京師範学校の校長（1879-81）と音楽取調掛長を務めた。音楽取調掛は公立学校向けに教科書を作成した。教科書を作成するにあたり、伊沢は日本の伝統音楽と西洋音楽を統合したいと考えていた。

東京に赴任したメイソンは、児童の指導と教員訓練にあたった他、演奏会を企画したり、音楽取調掛と協同して教科書を作成したりした。メイソンは通訳と宮廷雅楽師の力を借りて、こうした仕事を進めた。雅楽師の中にはメイソンが来日する前から西洋音楽に通じている人たちがいた。東儀はクラリネット、上眞行うえさねみちはチェロ、奥はフルート、辻はビオラを演奏した。琴、ピアノ、バイオリンを弾く高嶺（旧姓中村）夫人はメイソンの通訳を務めた。彼女の夫である高嶺秀夫は、オスウィーゴー州立師範学校に留学した後、東京師範学校の校長を務めた。¹⁸⁾

音楽教科書

音楽取調掛は日本の小学校向けに『小学唱歌集』を出版した。¹⁹⁾ 伊沢は日本音楽と西洋音楽を統合して新しいスタイルの学校唱歌を確立することを望んでいたが、『小学唱歌集』の大半は西洋の旋律であり、その多くがメイソンの *National Music Course* から採用されていた。*National Music Course* はホーマン（Christian Heinrich Hohmann）の *Praktischer Lehrgang für den Gesang-*

Unterricht in Volksschulen (『小学校歌唱指導実用教則本』) の英訳版に依っていた。²⁰⁾ 1870年代、メイソンの教則本とホーマンの教則本の英訳版は国会図書館で閲覧することができた。²¹⁾

メイソンはアメリカのフォーク音楽や作曲家を広めることには関心がなかった。彼の関心は、ヨーロッパ歌曲をアメリカの学校で教えることにあったのである。メイソンは1872年と74年、さらに82年から83年、90年から93年にヨーロッパを訪問し、学校をまわって何百という唱歌集を収集し、自分の蔵書に加えた。²²⁾ 『小学唱歌集』に収録された曲の多くがアメリカの音楽教科書に依っていたが、大半はアメリカではなく、ヨーロッパの曲であった。²³⁾ 『小学唱歌集』が重要なのは、この本が文部省によって認可され、日本全国で使用されたからである。多くの曲は20世紀後半の音楽教科書にも残っていた。

1890年代、伊沢は小学校向けに6巻本の『小学唱歌』を出版した。²⁴⁾ 理屈の上では伊沢は伝統的な日本音楽を支持していたのだが、実質的には道徳的な観念を伝えるため主に西洋の旋律を用いた。伊沢はメイソンの *National Music Course* を素材に用いた。とりわけ1890年代のメイソンの教科書に記されていた、西洋の音階に関する理論的説明を採り入れた。

西洋音楽のコンサート

鹿鳴館は大規模な2階建ての迎賓館で、1883年東京に建設された。鹿鳴館ではきらびやかな夜会が催され、西洋風の装いをした日本の紳士淑女が、陸軍や海軍軍楽隊の演奏にあわせてワルツ、ポルカ、カドリール、マズルカを踊った。²⁵⁾ 上流社会の人びとは、大日本音楽会後援の鹿鳴館コンサートを楽しんだ。奏者は通常、東京音楽学校の教師や生徒たちだった。東京音楽学校ではヨーロッパから招聘された教授が教え、多くの生徒が海外に留学した。ピアノ教師の永井繁子(1861-1928)はニューヨークのヴァッサー・カレッジに学び、バイオリン教師の幸田延(1870-1946)はボストンとウィーンに留学した。²⁶⁾

東京と横浜の英字紙には1880年代のコンサートの論評が掲載されている。1873年に創設された横浜合唱協会のオーケストラは、ジョアキーノ・ロッシーニの『アルジェのイタリア女』序曲、ヨハン・シュトラウスのワルツ、フランツ・フォン・スッペの序曲を演奏した。²⁷⁾ 1880年に東京で催されたコンサートでは、フランツ・エッケルトの指揮で、帝国海軍軍楽隊がリヒャルト・ワグナーとシュトラウスの曲を演奏し、20人のメンバーから成る東京 *Gesang-Verein* (合唱協会) が歌った。²⁸⁾ 1881年には横浜合唱協会がロンドンのゲイエティ劇場でギルバートとサリバンのオペラ *H.M.S Pinafore* を演じた。²⁹⁾ 1882年、帝国海軍軍楽隊はワグナーの『タンホイザー』から行進曲と、日本歌曲を基にした幻想曲2編を含む8つの曲を演奏した。日本の音楽家は尺八、三味線、琴を用いて、日本の曲と中国楽曲を演奏した。³⁰⁾ しかし、1890年代になると西洋化に対する反動が生じ、ナショナリズムが息を吹き返し、西洋音楽のコンサートに対する関心は薄れていった。

結論

20世紀を通じて、スティーヴン・フォスターの音楽は日本で高い人気を博した。1850年代、

日本人はアメリカの艦隊に乗り組んでいた楽団を通じて、初めてフォスターの曲に触れた。明治時代になると、日本人は軍楽隊の音楽、キリスト教の讃美歌、学校唱歌、ヨーロッパのコンサート音楽など、多様な西洋音楽に親しむようになった。1880年代から90年代にかけての日本の音楽教科書では、日本の伝統音楽とアメリカやヨーロッパの唱歌集の音楽が統合された。20世紀を通じて、日本でフォスター人気が高かったのは何ら不思議ではない。なぜなら、日本人は19世紀後半に多様な西洋音楽に触れ、その結果として西洋音楽が日本文化の一部となっていたからである。

注

- 1) ベリーの自伝については Samuel Eliot Morrison, “*Old Bruin*” *Commodore Matthew C. Perry 1794-1858* (Boston: Little, Brown and Company, 1967) を参照。
- 2) 同 326, 328 頁。
- 3) 同 331-35 頁。
- 4) 同 340 頁, 348-50 頁。
- 5) 同 363 頁, 370 頁。以下も参照 Matthew Calbraith Perry, *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*, compiled by Francis L Hawks (Washington, D.C.: A.O.P. Nicholson Printer, 1856), vol. 3, pp. 344-46, 353.
- 6) Morison, “*Old Bruin*,” 378.
- 7) 同 381 頁。
- 8) 同 351, 394 頁。
- 9) 同 397-398 頁。
- 10) Nomura Kōichi, “Occidental Music” in *Japanese Music and Drama in the Meiji Era*, ed. Komiya Toyotaka, trans. Edward G. Seidensticker and Donald Keene (Tokyo: Obunsha, 1956), 452-57.
- 11) Sondra Wieland Howe, *Luther Whiting Mason: International Music Educator* (Warren, Mich.: Harmonie Park Press, 1997), 68-69.
- 12) Howe, “The Role of Women in the Introduction of Western Music in Japan,” *The Bulletin of Historical Research in Music Education* 16, no. 2 (January 1995) : 84-86.
- 13) Howe, *Luther Whiting Mason*, 55-57.
- 14) スコットに関する詳しい情報は, Benjamin C. Duke, *The History of Modern Japanese Education: Constructing the National School System, 1872-1890* (New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 2009), 112-29 を参照。
- 15) 同 219-29 頁。
- 16) Howe, Mei-Ling Lai, and Lin-Yu Liou, “Isawa Shūji, Nineteenth-century Administrator and Music Educator in Japan and Taiwan,” *Australian Journal of Music Education*, forthcoming.
- 17) Luther Whiting Mason, *First Music Reader* (Boston: New England Conservatory of Music, 1870) ; *Second Music Reader, Third Music Reader* (Boston: Ginn, 1872).
- 18) Howe, *Luther Whiting Mason*, 84-86.
- 19) 『小学唱歌集』3 巻, 音楽取調係編纂 (東京, 文部省, 1881-84)。
- 20) Christian Heinrich Hohmann, ed. *Practical Course of Instruction in Singing, Prepared on School Principles*, trans. from 5th German edition, 4 vols. (Boston: Oliver Ditson, 1856-58) ; *Praktischer Lehrgang für den Gesang-Unterricht in Volksschulen* [Practical Curriculum for Singing Instruction in Elementary Schools], 4 vols. (Nordlingen: Beck'schen buchhandlung, 1853-89).

- 21) Hiroshi Yasuda, 著者への手紙, 1991 年 9 月 21 日。
- 22) Howe, "the Nineteenth-Century European Tours of Julius Eichberg and Luther Whiting Mason," *Bulletin of Historical Research in Music Education* 15, no. 1 (September 1993) : 1-16.
- 23) 『小学唱歌集』に収録された曲の写しとそれらのソースについては斎藤基彦のウェブサイトを参照。
<http://www.geocities.jp/saitohmoto/hobby/music/primaryfiles/primary-en.html>, accessed October 1, 2013.
- 24) 伊沢修二『小学唱歌集』6巻（東京，大日本図書株式会社，1892-93）。『日本教科書大系』60-188 頁に再掲。
- 25) ウィキペディア "Rokumeikan," <http://en.wikipedia.org/wiki/rokumeikan>, accessed September 26, 2013.
- 26) Julia Meech-Pekarik, *The World of the Meiji Print: Impressions of a New Civilization* (New York: Weatherhill, 1986), 162-67, 170.
- 27) *The Japan Times*, April 13, 1878.
- 28) *The Japan Herald*, June 18, 1880.
- 29) *The Japan Herald*, April 20, 1881.
- 30) *The Japan Herald*, May 23, 1882.